

コミュニティセンター建設のご報告～ケニア奥地の農村に保健医療のための施設を～

2013年5月より実施いたしましたケニア・ゲムイースト村コミュニティセンター建設募金は皆様方から温かいお志を賜わり、目標金額の200万円を大きく上回る総額2,620,502円のご寄附を頂きました。改めて御礼申し上げます。

募金は昨年8月13日に236万円をケニアに送金し、その後にご寄附頂いた260,502円はアサンテナゴヤにてお預かりしております。現地の協力団体であるルーネルド(RUNELD: Rural New Life Development)の監理のもとで建築が進められ、9月の医療キャンプで現地を訪れた際には私たちの想像していた以上に工事が進んでいるのを見て感激いたしました。建築作業をしているにはゲム村の人たちです。村では現金収入を得る手段が極めて限られており、建設は村人に仕事を提供できる貴重な機会として歓迎されています。

ルーネルドの専務理事エリアス牧師は資材の手配や工期の管理に工夫をし、支援金をできるだけ有効に活用するよう努めて下さっています。会計報告もきちんと送られてきており、彼らが私たちの信頼に応えようと誠意をもって取り組んでいることが伝わって参ります。1月中の工事の完了を目標にしていると連絡を受けています。



センターは①外来診療、②HIV等の検査と陽性者へのカウンセリングやフォロー、③情報発信や啓発活動の実施の場として活用される計画です。しかしその実現には様々な困難が予想されます。政府に医療スタッフの派遣要請をしますが、ケニアの医療体制は不十分で見通しは決して明るくありません。備品や機材の購入が必要ですし、診療、検査やカウンセリング、啓発活動の実施においても費用が掛かりますが、ルーネルドには資金がありません。支援活動はセンターの建設によって、ようやく入口に到達したと言える段階です。私たちはセンターが建設は村の人たちの生活に変化をもたらすことができると確信しています。アサンテナゴヤの活動にご理解を賜わり、今後ともご支援下さいますよう何卒よろしくお願い申し上げます。





目次

- ・ 理事長挨拶
- ・ 2013 年度医療キャンプ寄稿文
- ・ ダグラス・レポート
- ・ キャンプ行程表・会計
- ・ お知らせ等



ご 挨 拶

平素は私ども、NPO 法人アフリカ支援アサンテナゴヤにご理解とご支援を賜り、厚くお礼申し上げます。

私どもが 2010 年から継続して参りましたケニア奥地・GEM EAST 村における無料医療キャンプは、今回で 4 回目の実施となりました。この間、多くの方々にご支援・ご協力をいただき心より感謝申し上げます。

今回のキャンプでは期間中留守役として、参加されている皆様の健康や活動状況がとても気になっておりましたが、現地ではさまざまな困難なことを皆様の素晴らしいチームワークで乗り越えられたと報告を受けました。参加いただいた方々、本当にありがとうございました。

昨年 5 月から 8 月までのゲム・イースト村コミュニティセンターの建設募金に際しましては沢山の皆様のご協力くださり、私どもが目標としていました金額よりも多くの募金を賜ることとなりました。心よりお礼申し上げます。

私どもは 5 年前、縁あって GEM EAST 村を訪ね、現地の人々が医療環境の整備とクリーンな水を熱望していることを知り、翌年から現地協力団体ルーネルドと連携して無料医療キャンプが始まりました。「いつかこの村に医療の核となるセンター建設を目標に」。その目標は現地のルーネルドも同じでした。その「いつか」は思いがけず早く訪れました。現地の方々の熱意と支援してくださる皆様方の温かいお気持の賜です。コミュニティセンターの建設作業は順調に進んでおり、今春 1 月末頃に完成予定であると現地から報告を受けています。この報告に、私どもはとても感動しております。

コミュニティセンターは地域の核となり、住民の方々の健康の拠点のみならず、地域の絆を結び付ける場所になると確信しております。私どもアサンテナゴヤは、今後はコミュニティセンターを活用した活動を現地のルーネルドと連携して進めて参りますが、このセンターの建設完成は現地の人々に対する支援活動の入り口に到達したにすぎません。コミュニティセンターが健康の拠点になるためには、医療人員の確保、医療に必要な設備や備品の購入、医療活動や啓発活動のための経費など、まだまだ多くの支援が必要です。また現地の人々にとって念願のクリーンな水を供給できるように井戸の掘削もしなければなりません。支援の継続は困難も伴いますが、私どもは現地のルーネルドと共にこの長い道のりを

前進していこうと気持ちを新たにしております。そのために今まで以上の私どもの努力は言うまでもございませんが、皆様方の御力添えも欠かせません。当会へのご支援の継続をお願いし、また勝手なお願いではございますが、皆様の周りの方々にも是非当 NPO への入会をお勧めいただければと存じます。

今後ともアサンテナゴヤへのご理解とご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

アフリカ支援アサンテ ナゴヤ 理事長 石川 佳子

初のケニアキャンプに参加して

東京都立駒込病院 感染症科 森岡 悠
過去参加した医師から、ケニアキャンプのことを聞いてから、アサンテ名古屋の医療キャンプに興味を持っていました。「ケニアに行ける」「マラリアや HIV、現地の様子を体験することができる」ことがとても私の好奇心を刺激し、今回参加させて頂く経緯となりました。日本における HIV 診療・熱帯病診療も多少なりともかじったつもりではありますが、アフリカではどんな感じなのだろう、と興味を持っておりました。



1 週間の医療キャンプにおいて現地の方々にできる事は限られています。今回、我々内科チームの目標としては、HIV の診断をつけ、早期に抗 HIV 療法を導入するきっかけにすることを掲げていました。ケニアは HIV の有病率が 5-10% 程度と報告されていますが、この地域は 15% 程度ようです。国を挙げて HIV を減らすため、カウンセリングや診断が病院でなくても行えるように、地域に VCT(voluntary counseling and testing)の施設がいくつかあり、JICA の方々も協力されていました。今回、我々は診療の傍らでなるべく多くの方に HIV スクリーニングを勧めました。実際のところ、かなりの方で既に HIV スクリーニングを受けたことがあるようで、この地域における HIV に対する認識が高いことを改めて実感しました。今後は、GEM 村でスクリーニングやカウンセリングが行えるようにすることが目標とお聞きしています。そちらが上手く軌道に乗るように支援を継続していきたいところです。

また、現地人のマラリア症例を何例か経験させて頂きましたが、やはり日本人がマラリアに罹患するよりも軽症なんだ、ということがよくわかりました。発熱を主訴に来院した子供でマラリア迅速検査で陽性と判明して Artemether/lumefantrine を処方しましたが、そのまま隣でサッカーをしていたレベルです。勉強させて頂きました。

ケニアにおいて、真っ先に下痢でダウンしたり、ホテルでの事故で被害を被ったりとケニアキャンプの災難を最も受けた参加者だと自負していますが、それでもとても楽しく、貴重な経験となりました。アサンテ名古屋と現地のルーネルドの方々の協力で、コミュニティーセンターが日々完成に向かっていているのをみると感慨深いものがあります。継続した支援の重要性を改めて思い知った次第です。

最後に、貴重な機会を与えて下さり、また準備・運営に多大な労力を費やして下さったアサンテナゴヤの皆様へ感謝を申し上げます。

ケニア医療キャンプに参加して

日本赤十字社和歌山医療センター
感染症内科/国際医療救援部 古宮伸洋

2011 年に続いて 2 回目の参加でしたが、前回と違って今回は妻（小児科医）も一緒に参加させて頂きました。久しぶりに訪れた Gem 村は変わらず美しく、子供たちのちょっとはにかんだ笑顔

は可愛く、村の人たちは穏やかで、ルーネルドメンバーはフレンドリー、初日からやっぱり来て良かったと感じました。村に着くとゆっくりする間もなく医療キャンプが始まりましたが、さすがに恒例行事になってきたためか、とてもスムーズにセッティングがされていきます。

診療ではやはり「歯が痛い、手が痛い、腰が痛い、全身が痛い」と鎮痛剤を希望される方が圧倒的に多く、咳が出る、お腹の調子が悪いといった訴えがそれに続きます。中には様々な訴えをされる方もいるのですが、普段医療機関にかかることが出来ないのとお薬を手元に置いておきたかったのかもしれませんが。しかし訴えや希望に合わせようとすると何種類もの薬になってしまい正しく内服出来るのかはなはだ疑問です。日本で医師、看護師、薬剤師が丁寧に説明して説明書まで渡すというところまでやっても、いい加減に内服してしまう方が多いのですから。訴えの中から重要性の低いもの、治療効果の低いものに関してはあえて薬を処方せず、分かりやすいシンプルな処方しなければなりません。無駄な処方は有害になります。

昨年、マラリアの検査を積極的にしてみるとかなりの方がマラリアに罹患していたことが分かったとのことでしたので、ちょっとでも疑った患者は積極的に検査してみました。やはり結構な数の方がマラリアに感染していました。抵抗力のない日本人がマラリアに罹って治療をしなかったら 100%死亡します。しかし現地の人たちは治療してなくても重篤な症状は出ていません。これ



はアフリカの歴史の中でマラリアに強い遺伝子を持つ人たちが生き延び

てきたことと、マラリアに何度か罹って抵抗力を獲得しているためです。以前に長崎大学がビクトリア湖畔に住んでいる小学生を対象にしてどれくらいマラリアに感染しているか調べたのですが、なんと半数くらいが感染していたということです。**Gem** 村でも詳しく調べるとそれに匹敵するくらい感染者がいるかもしれません。

今回は HIV、梅毒陽性者への告知も担当させて頂きました。今年も新たに多くの HIV 陽性者がいらっしゃいました。その中に高校生も数名含まれていたのにはショックを受けました。言葉の問題もあるのでカウンセラーであるダグラスにすぐに引き次ぎましたが、今後うまくフォローされていくことを期待するしかありません。梅毒陽性者もかなりいました。一応説明して薬を処方したのですが、病気についてほとんど理解してもらえていなかったように思います。僕の説明が悪かったせいでもあるのですが、ルーネルドメンバーに聞くと最近の若い人たちには学校教育で教えられているが中年以上の人たちはそういったことを学ぶ機会がないからとのことでした。

まだ子供が小さいので夫婦二人揃って参加することには躊躇もしましたが、二人とも参加させて頂き本当によかったと思っています。自分たち自身としては楽しく、いい経験なのですが、数日間の医療活動で何が出来るのだろうか？はたして村のためになってるのだろうか？ということについて常に考えるようにしていました。少なくとも害になることだけはしないようにしなければなりません。それが出来たかどうか活動を終えてもまだよく分かりません。私は日本赤十字社に勤務していますが、赤十字の活動でもこの辺りは大変に問題になっているところです。国際医療活動、支援活動というのは大変に難しいものだと感じます。

最後になりましたが、アサンテおよびその支援者の皆様には、今回の活動に参加させて頂きました事を心より感謝いたします。

2013 年医療キャンプについて

日本赤十字社和歌山医療センター
小児科 古宮 圭

今回、はじめての参加させていただきました。何から何までお世話になり、本当に感謝しています。私個人としては（主人が2年前に参加していたこともあり）大きな心配事もなくキャンプに臨めました。そして、この医療キャンプは想像していた以上に日本とケニアの両方の人々に影響を与え、多くの人を元気にしていると思いました。私は小児科という立場で、いつもは地域密着型の一対一対応の診療をしています。地域の子供たちの生活を長い目でフォローアップするのが基本の仕事ですので、短い期間限定の国際救援は、興味がなかったというか、質の違う医療と思っていました。国際救援を考えると、現在の活動がはたして「人々の役に立っているのか」というのが常に問題になるだろうと思います。短い限られた期間では「人の役に立てない」のではないかという不安が当初はありましたが、よく考えられたプランで、短い期間でも何年にもわたって繰り返し行うこと、目標を新たに立て直していくことなどの努力で、「人の役に立てる医療」を提供できるんだ、と思いました。その努力を怠らないことが大事だと思います。アサンテの活動は目的が明確であり、アサンテの活動を受け止めてくれる側（ゲム・イースト村のパパヤルーネルドのダグラスさん）の意見も反映しやすい環境、というのが価値

あることだと感じます。医療の提供というと少々おこがましいですし、上からの目線になってしまいます。会話の中で、何か役に立てることがあり、相手を笑顔にすることができれば「うれしい」。医者と患者の間に、病気を治せる可能性があるとなると両者が「うれしい」。そんなあたりまえのことが、今の日本では失われている感覚なのかもしれません。我々日本人のほうが、この医療キャンプを通して対人関係とか医師—患者関係の原点に戻らせられていると思います。



また、国際救援という中でたくさんの分野でたくさんの方が、誠心誠意で働いていることをしり、とても感動しました。JICAの方、そのブレインともいべき澤崎さんのような方、現地にひかれ活動を続ける讃岐さんとか・・・たくさんたくさん・・・ほんの短期間一緒にいただけなのに目的をともにしていたので仲間意識まで芽生えています。また、再会したいし、また一緒に活動したいと思いました。本当に皆さんに感謝し、この出会いに感謝しています。

水道も電気もないゲム・イーストでしたが、こちらの通う人のつながりがありました。アサンテの活動が、人々の役にたち、多くの人を笑顔と元気にしますように。

ゲム・イースト村ボランティア診療を振り返って

墨東病院感染症科 小林謙一郎

皆様、今年も大変お疲れ様でした。二年前に初めて参加させていただきましたが、今年も充実した1週間でした。帰国して約3週間経ちましたが、今のところ体調は問題ありません。日常業務に戻り、日々忙しい日々を送っています。今回の診療を通して気づいた点を幾つか書きたいと思います。

今年は約1200人の患者のうち190名にHIVテストを実施し、約20%の陽性者でした。村の抗体陽性率を考えると妥当な数値かもしれませんが、相変わらずHIV患者が多いことを実感しました。このボランティア診療の目的は、無症候期のHIV患者をなるべく早期に発見し、治療に乗せることなので、今回も38人のHIV患者を診断できたことは大きな収穫と思います。

ゲム・イースト村での診療は今年で4回目にな

ると思いますが、私たちの活動が今後より充実したものにするには、幾つかの新たな取り組みが必要になってくると感じました。診察に訪れた患者のうち、最近どこかで HIV の検査を受けたという者も多くいて、HIV 検査とカウンセリングはある程度普及していると思います。他の先生達とも話していたことですが、現況では過去に HIV と診断した患者たちがどれくらい継続して治療を受けているかわかりません。そこで新たに HIV



と診断した患者のデータを保管し、患者には紹介状のようなものを持たせ、病院を受診したことがわかるようにするのはどうでしょうか。それには地域の病院との連携が必要ですが、村に来年拠点ができるのでフォローは可能だと思います。

HIV から話は変わりますが、今回もお腹の調子

が悪く、虫のようなものが出てくると話していた子供が何人かいました。おそらく回虫症などの消化管蠕虫だと思います。顕微鏡がなかったので虫卵検査ができなかったのですが、村に施設ができれば顕微鏡を設置し、検便することで感染率の高い寄生虫症を診断できるかもしれません。衛生状況があまりよくないので、治療をしてもすぐに再感染するかもしれませんが、年に一度村の子供たちに抗寄生虫薬（アルベンダゾール）を内服させるのは効果があると思います。

今回も新たな HIV 感染者を発見することができ、また、多数の患者を診察することができました。地域の健康向上に少し貢献できたかなと満足しています。HIV と診断された彼らが順調に治療へのことを望んでいます。今後、アサンテ名古屋の医療キャンプに毎年参加するのは難しいと思いますが、また参加したいとおもいます。この度は誠にありがとうございました。

再びケニアへ

薬剤師 渋谷伸子

昨年に引き続き第4回ゲム村無料医療キャンプに参加させていただきました。昨年一緒に活動させていただいたアサンテナゴヤの皆さん、またケニアで出会った仲間達に再び会えることができたことがたいへん嬉しかったのと今年も新しい出会いがあったことをたいへん幸せに思います。

昨年は診察後の患者さんが薬局に集中したために調剤に時間がかかり薬剤交付が遅くなったという反省点がありましたので、今年はそのようにならないようにと薬局として工夫がありました。簡単な処方はその場で薬剤を渡すなど先生

方にも御協力をいただき、ケニア人ボランティア2名、薬剤師3名、



日本人ボランティア1名で、人数的にも昨年よりも2名増員で無事に乗り切ることができました。

今年印象的だったのは、マラリアにかかった少年を学校の先生がキャンプに連れてきたことです。医師の診察を受けて薬剤交付を待っている間はぐったりとしてずっと地面に寝ていました。そのあまりにも重症な様子の為飲み薬ではなく注射で治療しました。その子は翌日すっかり元気になってまたキャンプに来ていたことを聞き、医療の素晴らしさを感じました。特に注射剤の即効性には驚きです。

もうひとつ嬉しかったことは、チャイルドドクターを通じて支援している少女にお土産を渡すことができたことです。昨年チャイルドドクター・ジャパン病院を訪問してドクター制度の事を知り、早速登録させて頂きました。ケニア行きの出発が近づいた時に、もしかして私の支援する少女と何か交流ができるのではないかと思いケニア事務所に事前に連絡を入れさせて頂きました。お返事としては日本のお菓子に興味を持っているのでお土産にそれがいいのではということ

した。その少女は孤児院で生活しているそうなので、孤児院のみんなで分けることができるような飴やチョコレートなどを日本の出発時に購入しました。ケニア初日、薬剤を受け取る為にチャイロク病院を訪ねた時にスタッフにお菓子を渡しました。少女とは会うことはできなかったのですが少女からは手紙が用意されていました。またその少女のいる孤児院の担当スタッフからはお菓子のお礼ということでパイナップルを頂きました。翌日夜みんなで食べましたけどとっても甘くて美味しいパイナップルでした。その孤児院にはアサンテナゴヤからも多くの文房具が寄付され、後日スタッフ達の喜びの写真が送られてきました。みんなとても素敵な笑顔です。

最終日のナイロビは銃撃戦があり死傷者も出

ておりました。日本と比較するとやはり決して安全ではないということを実感した今回の旅でありました。

今年の医療キャンプは診療をしているテントの横でコミュニティセンターが着々と建設されていました。来年は完成したコミュニティセンターで今年とはまた違ったキャンプになると思います。今年もケニアのゲム・イースト村における医療キャンプ活動に参加し貴重な体験をさせていただいたことに心より感謝申し上げます。アサンテナゴヤの皆さま、一緒に参加した皆さまには本当にお世話になりました。

今年もケニアへ

獣医師 水谷 裕子

今年もゲムイースト村に来ることができました。いつも通り村の人たちは明るくて元気で、しかもボランティアさんたちはずいぶんキャンプの流れを把握してくれているなあと感じます。

検査は昨年から、希望者全員に行う簡易検査と、簡易検査が陽性の場合にCD4値を数える検査の二本立てになりました。検査にかかる時間がずいぶん長くなったことから、今年は簡易検査はできる限りキャンプの現場で行うことをお願いし、提案を受け入れていただけました。おかげでホテルに帰ってからすべての検査を行う必要がなくなり、時間にも昨年より余裕ができ、ゆっくり体を休めることができました。時間短縮が目的で現場で検査を行うことになったのですが、屋外は明るく、検査試薬の確認がしやすいこともとても助かりました。ホテルの部屋は決して明るいとは言えないですから。ドロップインセンターもキャンプ中にみるみる基礎が出来上がり、12月には竣工式の予定だと聞きました。ゆっくり、変わらない、進まないという言葉を目にすることがあります

が、これらの言葉は世界中のどこでも当てはまらなくなりつつあるのかなあと感じます。

私の興味は相変わらず村の人の生活がどんなものなのか、です。食習慣や生活習慣は利便性の高い家屋の登場やインフラ整備ぐらいでは簡単に変わらないはず。とすれば、ドロップインセンターができ、いつか村に電気が来たとしても、根強く残る問題が生活の中に潜んでいるのではないかと思います。また、参加者の一人がレクチャーしてくださったケニア保健省で行われたエ



イズの全国リサーチもとても興味深かったです。

やはり村に入り込んで草の根的な調査ができたらいいなあと思われました。

いろいろな機関との連携が進み、事業は少しずつ大きくなったり、形を変えたりしているのかなあと感じるキャンプでした。キャンプに参加でき、これらの変化を目の当たりにすることができたことに感謝いたします。どうもありがとうございます。

アサンテナゴヤ：ケニア医療活動に初めて参加して

奥村 啓子

今回初めて参加するにあたって、昨年の活動CDやブログなどで発信されていた情報を見るものの、実際に経験していない私にとっては、やっぱり「ミステリーツアー」だな・・・と、実際現地に着くまでずっと感じていました。

参加するにあたってまず心配したことは、マラリア・破傷風などの予防接種のことで蚊の対策でした。蚊取り線香や虫除けリングなどをどのくらい持っていこうかしら・・・私は、よく蚊に刺されるので蚊の対策は真剣でした！

しかし、現地へ行ってみると、赤道直下の地域とはいえ、キャンプ場はまるで高原で蚊の心配はほとんどありません。家の周りや、畑は整然と耕作され、想像していたゴミはほとんど見当たりません。アフリカのマラリア発生は、家の周りのごみが原因という話を聞いていた私は、意外な思いをしました。

次に心配することは、預かる荷物の量でした。石川さんや岩崎さんから荷物の量については再三お話がありました。私が、出発前に預かった荷物、当日空港でトランクに詰めた荷物は、15kgはあったと思います。自分の荷物は最小限にしました。空港で自分のトランクに追加する荷物を詰めながら思いました・・・参加者が1人10kg～15kg持ったとして、全部で200kg～300kg！さらにプラスの荷物も多くありました。とすれば、400kg以上は軽くあるはずです。もしかしたら、500kgは超えていたかもしれません。これは全く想像以上でした。そして、毎晩、それらの荷物は、翌日のために整理・準備されます。私の初めての医療活動参加は、これらの荷物を目の当たりに見てビックリすると同時に、アサンテナゴヤの医療活動が容易でないことを実感しました。

3日後からキャンプでの医療活動は始まりました。テントはすでに現地のスタッフで張られ、アサンテナゴヤのスタッフは、それぞれに驚くほど

手際よく準備に取り掛かかられました。医師・看護婦・薬剤・検査と、どのスタッフの方々も、日本からナイロビまでの長旅の疲れは感じさせず、キャンプ場へ着くと、「さあ～、開始だ!」と、それぞれのお仕事をスタートするのです。初めての私は、薬局担当の1人として配置されましたが、ただただ戸惑うばかりでした。

診察を受けにやってきたのは、子供を連れてお母さんが多くいました。また、老人たちも多くいました。彼らの多くは老眼鏡が必要と訴え、薬局で簡単な検査をした後、老眼鏡を渡すのです。が・・・何人かの方に眼鏡を渡しているうちに、私は、『彼らが眼鏡を必要とするのは・・・いったい何を読むのだろうか？ 新聞？ 新聞を購読している？ 本？ ...そんな本がたくさんあるのだ



ろうか？ ...この地域の老人たちは、どんな時に老眼鏡が必要なんだろうか?』と考えてしまいました。

不思議に思った私は、隣に座っていた現地スタッフのジューマに、「彼らはいったい何を読むの？ そんなに読む物あるの？ 本当に老眼鏡が必要なの？」と、ぶしつけにも尋ねました。この質問は、まったくの私の無知で、とても失礼なものでした。私の質問にいささかびっくりした彼は、「毎日、新聞を読むよ！ 回し読みするんだよ。いろいろなチラシもあるしね。だから、彼らは大統領の選挙だって行くよ。」と答えてくれました。現地の人々の暮らしを十分知らない私は、恥ずかしいやら、申し訳ないやらでした。

キャンプでの医療活動を眺めながら、私は診察する医師たちの活動姿勢に敬服しました。本当に忙しい日本での日々、医師や皆さんにとって、夏休みは貴重な、また、待ち遠しい休暇だと想像します。その夏休みを返上して、こうして無料診察に参加されているのだ！医師はじめ、すべてのスタッフの皆さんの真摯な姿勢に心打たれました。

そんな思いの中で、あるシーンに出会い、さらに医師たちの純粋なお心に触れることができました。それは、キャンプへ行く途中での出来事でした。初日に、途中で内海まこと先生が、全身皮膚病にかかっている少女を見つけられました。そして、翌日、翌々日と、バスでキャンプ場へ向う途中、彼女を捜し、皮膚科の内海先生が診察されたのです。ふと見かけた少女に対する先生方の対応や姿は、私にとって、とても感動する出来事でした。

ケニアの村で、針灸治療をするというのも、私にとって驚きでした。針灸治療を、彼らがどのように受け入れているのだろうか、と興味津々だったのです。で、治療を受けた彼らに尋ねてみると、みな、「とても気持ちいい!」「ラクになった!」「針灸はいい!」と、とても満足そうに話してくれました。ここでも、私は、彼らに偏見を持っていたことに気づきました。彼らも私たちも同じなんだ…と恥ずかしながら、つくづく思うのでした。針灸治療は、本当に気持ちよく、とても楽にしてくれます。

現地のスタッフの方々もまたアサンテナゴヤのスタッフと同様、実に手際よく、スムーズに活動を進めていました。治療にあたっている医師と現地スタッフ、薬剤師と現地スタッフは、何の違和感もなく流れにそって活動するのです。薬局の石川さんに聞けば、「これは4年目を迎える実績で、最初は本当に大変だったんだよ!」と聞かされました。

スタート時の状況を想像し、ここまで統率されるには、時間と努力が必要だったことに感慨深く思った私でした。石川さんや他のスタッフの方々から聞くスタート当時の、やってくる村の人々の長い列、集まってくる多くの子供たち、薬局での混雑などのお話を聞き、今年の整然とした医療活動はそんな経過があってこそのことなんだと改めて思うのでした。そして、集まってくる子供たちを、ムチを持って何気なく追い払う現地の男性

スタッフにも、なんだか微笑ましい思いで見ることができました。

薬局の受付をし、カルテを見ながら、連日、診察にやってくる村の人々と接し、子供の様子・母親の様子・様々な服装・受け答え方…などなど、眺めているうちに、村の人々の日頃の実際の生活がとても知りたくなってきました。そんな思いでいるとき、スタッフの日比野さんからアンケートの相談を受けました。『う〜ん…アンケートか…難しいなあ。診察に来ている人は、答えてくれるかな〜あ』と、不安に思いながら…なかなか動きが取れないでいました。で、まず、現地スタッフのジューマに、「アンケートだけど…どう思う?」って聞いてみました。いろいろ話してやってみることにしました。

わずか15人からのアンケートですが、ほんの少し、村の人々の生活を垣間見ることができました。「親の年齢と子供数」ですが、10代、20代で5人、8人という子供の世話をしているんだと…改めて驚きます。そして、最も多いのが50代の方で15人の子供でした。また、余りにたくさんの子供たちを見て、ところで、「出産」は…?と、女である私は、また興味が湧いてきました。村には、いわゆる「産婆さん (midwife)」でしょうか、見よう見まねで助産をする女性は結構たくさんいて、彼女たちの介助で無事出産を終えるようです。でも、もし異常な状態で生まれてきたときはどうするのかな〜…いろいろ疑問はありましたが、時間がなく詳しくは聞けませんでした。

1日の食事回数は、普通2回ようです。2回の食事時間は、みな、午後1時と夜8時に取っています。1回と答えたのは、20代の男性で5人の父親でした。



また、病気になったときはどうするんだろうか?との疑問からのアンケートでは、15人中、13人は病院へは行かな

いと答えています。「遠い」「お金がかかる」が、理由です。そして、皆、お金のかからない薬局やスーパーで、薬を買うとのこと。買う薬は、「痛み止め (painkiller)」。彼らの常備薬は、「痛み止め」のようです。しかし、ストックするにも、時に不足すると答えています。

今回の医療活動で、マラリアにかかっている子供が診察に連れてこられ、ぐったり横になっている痛々しい子供は数人いました。すぐに飲み薬を与え、薬を処方されましたが、私はこの期間以外でこのような症状になったら、子供たちはどうな

るのだろう……。スタッフの方に尋ねたら、「まあ、死ぬんじゃない……」と。そして、私も、『そうなんだろうな〜』と思ってしまいました。……コミュニティセンターが完成したら、そこに薬をストックし、必要な時分けられるようにできればいいな〜と、軽薄な思いを描いてしまいました。

以上のように、今回参加させていただき、本当にいろいろな事を思い、私の人生にとって「新しい1ページ」を開くことができました。有難うございました。

ゲム村無料医療活動に参加して

鍼灸師 西いずみ

今回初めて参加させて頂きました。アサンテの活動を知ったとき、アフリカに行けるの？ ケニアで鍼が打てるの？ 行きたい!!

鍼灸の講習会で石川先生を見つけ「アフリカに行きたいです」ってすごく興奮しながら話したのをはっきり覚えています。

セントレアで大量の薬をトランクに詰め込み、長時間のフライト、バスでの移動も新鮮なことばかりで疲労感を感じる余裕も無いほどでした。

赤道直下のケニアですが、高地のためか思っているほど暑くなく気候は快適でした。グレートリフトバレーの景観は素晴らしいものでした。どこまでも広がる大地と青い空地面にうつる雲の影、迫力のある景色です。

鍼灸の治療はガタガタと揺れるベットに苦労しながら行いました、患者さんのほとんどは農業をされており日本では見ない様なしっかりとした筋肉質な身体をしています、大胸筋 背筋 殿筋の厚さは素晴らしいものですが、下肢の筋肉は年齢が高くなると固くなり関節の変形も多くなっているように感じました、骨格の違いはもちろんありますが、サイズの合っていない靴や生活習慣の問題もあると思います。比較的ゆっくりとしたペースで鍼を打たせて頂ける時は、脈を触った

り舌を見たりする事も出来ました、温暖な気候で普段から身体を動かしている人の身体はもっと血色の良い舌をしているものと思っていましたが、意外と舌の色が薄く暗い色をしている方が多く驚きました、東洋医学では舌の状態や脈の形で身体の中の状態を判断していきます、語学力が足りずに多くの事を聞くことや指導をさせて頂く事が出来ませんでした、食生活だけでなく衛生上の問題も多くありそうな気がします。

5日間だけの単発の鍼灸治療でいったいどれほど事が出来たんだろうか…と考えると少し空しく感じますが、キャンプのテントの横で休みなく続く作業でコミュニティセンターが徐々に出来上がっていくのを見ていると活動を続けていく事の重要性を感じる事が出来るような気がしました。

活動に参加させて頂き素晴らしい方たちに出



会う事が出来ました。

ケニアで活動をされているチャイルドドクターや JICA の方たちは最高でした、今まで知らなかった多くの世界を見せて頂きましたありがとうございました。

キャンプの1日目の夜に下痢がはじまりどうなるか…と思いましたが、皆さんに助けて頂き無事

に終える事が出来ました感謝しています。

ケニアのH I Vの減少と患者さんが適切な治療や援助を受ける事が出来る環境が1日も早く出

来る事を楽しみにしています、ありがとうございました。

無料医療活動に参加して

日比野 福代

参加希望が多い中、G E M I E A S T村に今回3回目の参加をさせていただいた。今回の参加人数は前回より多くJ I C Aの方や職種も様々にぎやかな活動であった。

中部国際空港に集合し、差し入れを頂いたのを食べながら出発した。アブダビに飛び、そこからナイロビへと以前より距離が短く感じるようになった。ナイロビに着くと1泊はナイロビにて薬品の調達、整理に当たった。翌日は陸路にてキシイに向かう。宿泊するニヤコエホテルが新しくなっており、前年のシャワーはお湯がでずに水になったりすることが懐かしく思えた。ホテルはエレベーターが無くこの重い荷物を手で運んでいた。日本では考えられない事かもしれない。

今回V C Tの見学をさせてもらい、現地のH I Vの取り組み状況を知り、そこに参加しているJ I C Aの日本の隊員が参加しており日本の若者の力が微笑ましく感じ、V C Tの活動がこんなに浸透していることに驚いた。今後の私たちの活動と継続的活動がより普及していくことが今後の成果になると痛感した。

さてキャンプ地へのお発、現地に行くと村の人々、ルーネルト、ボランティアの方々がテントを張りながら懸命の準備をしていた。その場所にドロッピングセンターの基礎工事が始まっており土をスコップで掘りながら工事が進んでいた。

私は採血担当で活動開始途端、採血フィルターと採血針が合わず飛んでしまうハプニングがお

きた。事前確認は実際採血していないため良かったが、この現場でこんなことが起ころうとは、すぐ内海D rに報告しホテルまで古い採血針を取りに行ってもらい午後からは何とかスムーズに採血が出来るようになった。今回のハプニングが事前確認の必要性を痛切に感じた。採血とマラリアの検査は前年と同様その後は採血に関してはトラブルなく終了した。マラリア検査の三分の一は陽性であり村の衛生状況や生活様式もより細かく知る必要があると考える。ホテルで火災発生、ケニアでのテロ事件と様々な出来事はあったが何とか無事にキャンプを終了した。

村はスコールがある為緑豊かで農業で生計をたてている方が多い。畑でトウモロコシ、ケール、



野菜等を育てている。飲み水は貯まった水や濁った水をくみ、沸騰させて食事に使用している。井戸を

掘ること、農業援助が今後の課題と考える。電気もないため夜はランプの生活、本は読めないだろう。子供たちはそれでも明るい笑顔で外を走りながら遊んだりしている。日本の子供たちと比較すると物には恵まれていないが笑顔が可愛い。こんな素朴な生活をしながら日々過ごし、日本の私たちは恵まれすぎて物を大事にしない日常生活になってしまっている。毎回日本に帰るとアフリカ支援に少しでも援助すること、日々の生活に感謝する気持ちを忘れないようにしたいと感じる。

この無料医療活動を企画していただきアサンテナゴヤの方々に深く感謝したい。

4回目の医療キャンプと

コミュニティセンターの建設

鍼灸師、アサンテ ナゴヤ理事 坂光 信夫

無料医療キャンプも4度目となりました。皆様の温かいご支援と参加者の方々の献身的なご協力のおかげで、今年も無事に実施することができ

ました。個人的には一昨年に続き2回目で、今回は事務局としての参加です。経験を踏まえ、レイアウトやカルテなどに工夫をし、大勢やって来る患者さんが受付・診療・検査・投薬とスムーズに流れるよう考えました。鍼灸チームで用意した現地ルオー語のテキストを皆様にもご活用頂きました。VCT(HIV 検査とカウンセリングの施設)見学の際、現地語で挨拶をして先方を驚かせたのは楽しい思い出です。それでも現地にいくと、思いも寄らないトラブルや事務局の不手際もありました。それらを無事に乗り切ることができたのは、参加メンバーの皆様と現地協力団体ルーネルドのおかげです。厳しい環境で体調を崩す方も少なくない中、団結力とプロ意識に感銘を受けました。

何より今年画期的だったことは、コミュニティセンターの建設が開始されていたことです。アサンテ ナゴヤは5月より建設募金を実施しました。現地の状況を懸念していましたが、村の人たちが協力して働き、キャンプの間にもレンガが積み上げていく様には感激しました。センターは医療をもたらすだけでなく、村の唯一の集会所としても機能します。ルーネルドのHIV啓発活動もより活発になるでしょう。センターを切望してきた村の人たちも、この早い建設の実現には驚いていました。今年5月までケニア駐在のJICA 専門家でいらした澤崎先生には大変お世話になりました。帰国間近のお忙しい中、ゲム村でルーネルドと話し

合いをしてくださいました。JICA 青年海外協力隊の方々もご紹介下さり、4名の隊員の方がキャンプにご参加くださいました。今後のルーネルドとの協働につながるものと期待しています。

この2年弱の間、ルーネルド理事のダグラスさんとEメールでやり取りを続けてきましたが、ようやく顔を合わせることができました。ホテルも同室で、繊細な彼には負担だったことでしょう。ゲム村に続き、彼自身の故郷アセンボでの活動の夢を語ってくれました。パパ、メリーさん、ダグラスさんの3人の理事と私たちとで多くの話し合いをしました。



彼らはコミュニティのために私心のない奉仕をしています。私たちが望ましいと思うそのままを彼らは語りました。アフリカでこのような信頼できるパートナーを得られたことは本当に幸運なことです。センターが機能し、村が自立するまでにはまだまだ多くの課題があります。まずはクリーンな水です。今後とも皆様のご理解とご支援をよろしくお願い申し上げます。

理事としての仕事にかかりきりの私を静かにサポートして下さったのは、鍼灸チームの西先生です。初めての参加で体調も万全でない中、治療の準備と片づけを全てやって下さいました。この場を借りて御礼申し上げます。

匿名の人

内海 眞

我々のアサンテ ナゴヤの活動は多くの人々の善意によって支えられています。ゲム村のコミュニティセンターも多くの方々の支援によって今年1月に竣工いたしました。このセンター設立のための募金活動はわずか数ヶ月間でしたが、予想をはるかに超える260万円余の尊い基金が集まり、昨年8月にそれをゲム村に送ることが出来まし

た。皆様のご協力に心から感謝申し上げます。

実はこの募金活動に先立ち、アフリカの人々のためにと言うことで私個人に預託された300万円があったのです。これを上記募金額に加えることによってコミュニティセンターが完成の運びに至ったという経緯があります。私はどうしてもこの多額のお金を預託して下さいたご夫妻のことをここにご紹介しなければならないと感じている次第です。

お二人は現在 70 歳を超えておられる我々の人生の大先輩であります。子供達は既に独立され、現在は愛知県の某市にお二人で暮らしておられます。ご主人は教育関係のお仕事をされていましたが、ずいぶん前にリタイアされました。とても静かで慎ましい方です。奥様もまた学究肌の方で、これまで一貫してご主人の研究と教育活動を支えて来られました。ご夫妻はまた現代世界に対する関心を強くもたれ、アフリカの事情や HIV 感染症／AIDS についても深い知識をお持ちです。絶えず学ぶ姿勢を保持しておられ、頭が下がる思いです。このご夫妻が 2000 年代半ばに 300 万円を私に預託して下さったのです。

私は 2000 年から N.Y. の I 先生に誘われて、ケニアのナイロビにあるスラムでの無料医療キャンプに参加してきました。年 2 回春と秋に行われるキャンプのうち、毎年秋のキャンプに参加してきたのです。スラムの貧しさは私にとって大きな衝撃でした。多くのスラムの人々は 1 日 1 回の食事しかしていません。スラムの中のゴミ捨て場で山羊と共に食料を探す老人の姿は私の心に深く刻み込まれました。両親を亡くした子供達がストリートチルドレンとして生活している姿もまた、強烈な印象として今でも思い起こされます。また、2000 年のスラムにおける HIV 検査で、受検した人々の 25% が HIV 陽性であった事実、特に 30 代女性の 53% が HIV 陽性であったことにも大きな衝撃を受けました。これらの事実を、ふとしたことで上記ご夫妻にお伝えしましたところ、私の預金通帳にポンと 300 万円を振り込んで下さったのです。もちろん、私はこのような大金を受け取ることをお断りしました。なぜなら、ご夫妻は決

してお金持ちではありませんし、老後の蓄えも必要と考えたからです。しかし、方針をお変えになることはありませんでした。

私はご夫妻に将来ケニアに診療所を建設した時に、その診療所にご夫妻のお名前を刻み込みましょう、と提案しました。ご夫妻はその提案に即座に、ほとんど反射的に反応され、「決してそんなことはしないで下さい、もしそのようなことをされるのなら今回の寄付は取り下げます。」と言われたのです。私は内心このようなご支援を大変ありがたく思っていたので、ご夫妻の予期せぬお言葉に驚きつつ、わたしの提案を撤回しました。そしてこのご夫妻は、ご夫妻の名前を決してどなたにも伝えないように、と私に強く要請しかつ念を押されたのです。しかも、お金の使途については指示されることなく、全面的にこちらに任せて下さったのです。

私は私に託されたこのご夫妻の意志を尊重し、この貴重なお金を是が非でもアフリカの人々のために役立てなければならぬと強く思うようになりました。私は大きな使命と義務を負うことになったのです。

2008 年の秋でした。名古屋在住の薬剤師である讃岐さんが我々のところに来られて、ケニアの西部にあるゲム村の HIV 感染症罹患率が非常に高いので何とか助けて欲しい、と懇願されたのです。讃岐さんと親しいケニアの友人の故郷であり、その友人もゲム村での HIV 感染症の拡がりを何とかコントロールしたいと熱望しているとのことでした。この時がゲム村での医療活動を決断した瞬間です。I 先生との活動方針の違いも表面化して来たこともあり、ナイロビのスラムでの活動



はこれまで一緒にやってきた釧路のグループに任せ、我々はナイロビからさらに660km西方の、電気も水道も交通機関もない周囲から隔絶されたゲム村に出向くことにしたのです。今、冷静にこの決断を振り返りますと、何と無謀な決断だったのだろうと冷や汗が出ます。讃岐さんの気持ちが我々を動かしたことはもちろんありますが、私個人の義務感、即ち前述のご夫妻の期待を何としてでも実現しなければならない、という義務感が私の背中を強く押したことは間違いありません。ご夫妻の気持ちが我々をゲム村に誘導したのです。

2009年にゲム村への調査旅行を実施し、2010年から昨年まで計4回の無料医療キャンプをゲム村で実施しました。医療キャンプは毎年少しずつ改善され、またキャンプに参加して下さる方々も増えてきました。もちろん、未だ十分な予防活動や医療はなされていませんが、ゲム村のNGOであるRUNELDと我々の協働活動は少なくとも村人の信頼を勝ち得たことは間違いないと思うのです。我々の力は限られていますし、資金も潤沢ではありません。ゲム村には秋に毎年1回行くだけのささやかな活動です。しかし、今回ゲム村に診療機能も併せ持ったコミュニティセンターが完成し、年に一度の我々の医療活動に加え、HIV検査やマラリア検査並びに簡単な投薬も可能な常時（少なくとも週に1回）村人に開かれた医療機能を発揮できることは、今後のゲム村のHIV感染症／AIDS対策に大きな進歩をもたらすものと期待されます。これからがゲム村での本格的なHIV予防活動・医療活動のはじまりです。前述のご夫妻はじめ建設募金に協力して下さった方々の温かいご支援がこのはじまりを可能にしたと思います。重ねて感謝申し上げます。

コミュニティセンター建設の中で驚いたことが他にもあります。実は一昨年の秋のキャンプでのことです。村の長老格の牧師さんがセンター建

設のためにご自身のお金で広い土地を購入したことです。我々は、いずれコミュニティセンターを建設しよう、そのための資金援助をしよう、と口頭で話していただけに過ぎないのですが、牧師さんはそれに全幅の信頼をおいてセンター建設のための土地を購入されてしまったのです。我々はRUNELDと、いついつまでにセンターを建設しようとして正式な協議をしたわけではありません。さらに、建設資金がどのくらい必要で、アサンテナゴヤはどれくらい資金援助が出来るのかも不明な段階で、つまり、センター建築の工程表が全くない段階で牧師さんは土地を購入してしまったのです。村人のためにセンターを出来るだけ早く建設しようという牧師さんの気持ちと、建設を支援する我々を何の疑いもなく信頼して下さった彼の気持ちに答えようと、我々は建設のための募金活動を早めたのでした。

結果として、目標を上回る基金を準備でき、工事を開始でき、1月には完成の運びになったわけです。すべてが順調に進んだと言わねばなりません。この順調な進展を準備して下さったのは、前述のご夫妻であり、牧師さんであり、多くの支援して下さった方々の善意であり、美しい精神であったと思うのです。そのような善意と精神が、今回のセンター設立の工程の中で終始貫かれていたのではないかと私は思うのです。美しい精神こそがセンター完成を可能にした、と言っていいのではないのでしょうか。



ルーネルド／アサンテ ナゴヤ2013年度医療キャンプレポート

RUNELD 理事 ダグラス・オティエノ

ルーネルドは2013年9月16日から20日までの無料医療キャンプを成功させることができました。今回でアサンテ ナゴヤと協催したキャンプは4回目になります。私たちはキャンプの1か月前から横断幕、ポスターなどで主要な集会所や組織に対して宣伝をしました。私たちの予想以上に多くの患者がやってきて、村の人たちの期待の大きさに圧倒されました。それでも大きな問題もなくキャンプを完了できたことを神に感謝します。そして私たちの招きに応じて下さった医師や専門家の皆様に感謝します。彼らは心のこもったサービスを提供するために勇気と献身をもって、奉仕のために来てくれました。この場をお借りして、アサンテ ナゴヤ代表の内海眞医師とお忙しい中時間を割いてキャンプに参加して下さいた皆様に御礼申し上げます。

キャンプはゲムイーストのオンガンガ村とその周辺のコミュニティに無料の医療サービスを提供しました。ゲムイーストで無料医療キャンプを立ち上げたのは、適切な医療を受けられない貧しい人々を支援するためです。最も近くにある地域の診療所でさえラングウェ村にしかなく、そこには7キロほど歩いていかなくてはなりません。地元のアスンビにあるヘルスセンターは地元コミュニティの必要を満たすのに十分な設備が整っていません。私たちは、生活水準を向上させるのに助けを必要としている人たちの社会、経済的状況を向上させることもまた目標としています。そうした人たちも生活が向上すれば地域により効果的に貢献できるようになるからです。

医療キャンプの成果はとてすばらしく、1346人の症例が診察され、様々な方法で治療されました。老若男女が医療キャンプを訪れ、1166人が医師の診察を受け、108人が歯科、72人が鍼灸にかかりました。マラリア検査を受けたのは191人で、その内79人が陽性で薬を受け取りました。HIV検査は189人が受け、陽性が38人でした。陽性率は20.1%と国内感染率の4倍でした。彼らはアスンビ・ミッション病院、ナンバ・ヘルスセンター、ラングウェ・ヘルスセンター、オムベク・ヘルスセンターそしてリアンナ・ヘルスセンターといった近隣の医療施設でさらなる治療を受けることになります。

私たちは、アサンテ ナゴヤからルーネルドへの継続的な支援に対して、その組織とそのメンバーの双方に対し、心から深く御礼申し上げます。2人のルーネルドのメンバーについても特に記したいと思います。メリー・アコス・エリアスは組織のリーダーとして能力を発揮し、ダグラス・オティエノはリーダー補佐として、メリーと上級理事のエリアス・オゴンダ氏の指示のもとに仕事をしました。医療キャンプのために私たちと共に時間を捧げ、全てのプロセスを大成功に導いた全てのボランティアの自己犠牲的努力にも感謝します。

最後になりましたが、ルーネルドはこの機会にアサンテ ナゴヤがヘルスセンター建設の便宜を図って下さったことに感謝します。あなた方とあなた方の代表の内海眞医師を讃えます。



2013 年度 キャンプ行程表

2013 年度 無料医療キャンプ 行 程 表			
9/12 (木)	13:35-15:35	中部国際空港⇒アブダビ	長崎・沖縄・東京組合流
9/13 (金)	9:40	ナイロビ着 チャイルドドクターにて薬剤受け取り	澤崎氏合流 夕刻 JICA 職員等会食
9/14 (土)		キシ（ベースキャンプ地）へ出発 VCT 見学	讃岐氏・ダグラスさん合流 JICA 隊員 2 名合流
9/15 (日)	08:00-13:00	VCT 見学	
	09:00-17:00	医療キャンプ準備	
9/16(月)～9月20日(金)		GEM EAST (キシ泊)	無料医療キャンプ
9/21 (土)		キシ⇒ナイロビ (陸路)	夕刻チャイルドドクター-宮田氏会食
9/22 (日)	10:00-	ナイロビ⇒アブダビ	
9/23 (土)	13:55	中部国際空港到着	

2013 年度 無料医療活動総支出 (キャンプ参加人数 2013 年 27 名、昨年比 6 名増)

		2012 年度
旅費・交通費(航空運賃 14 名分含む)	3,450,238	2,939,631
謝金・寄附	138,451	130,683
医療消耗品等	670,935	506,658
医療廃棄	11,968	11,235
医療以外消耗品及び会食・食材費(キャンプ地昼食)	332,905	490,375
雑費等	9,921	19,532
合計	4,614,418	4,098,114

為替レート

1 \$ 85.6ksh

1 \$ 81.68ksh

* ビザ取得 (ナイロビ空港) US \$ 50 は自己負担といたしました。

お 知 ら せ

- * 2014 年アースデー高山参加予定 : 6 月上旬
- * 2014 年度アサンテナゴヤ講演会開催 : 6 月中旬予定
- * 第 26 回愛知サマーセミナー参加 : 7 月中旬
- * 2014 年度の渡航は 2014 年 9 月 12 日 (金) ～9 月 23 日 (火) を予定しています。
- * モリコロ基金申請 (大規模事業 : 平成 25 年 10 月 30 日申請書提出)
2 月上旬に第一次審査の結果がいただける予定です。(二次審査は 3 月上旬の予定)

*** 会費、賛助会費、協賛及び寄付金をいただいた企業・団体および個人（敬称略）**

（平成 25 年 6 月 1 日から平成 26 年 1 月 10 日までにご支援をいただいた皆様です）

（株）両藤舎 佐藤円三・（有）ヤマフ土地・青木孝夫・青木孝・川合香名子・青山真夕・青山純也
尼子道子・（医）石田整形外科 石田義人・池場隆・池見博子・飯田展弘・石井圭子・石居尚子・石川博司
石川美里・石川佳子・石丸佳代子・市野健二・石黒博人・伊藤絹代・一宮中ライオンズクラブ・稲垣やよい
内海みどり・内海大介・井上真里・井上由記恵・今井幸宏・富田道・石田義人・岩田光・岩堀裕之
今枝美穂子・内海悠子・岡節世・岡田智子・岡田はるみ・大岩洋子・大下博・岡本裕子・小川賢二
奥村啓子・内海眞・小木曾義治・小木曾悠紀子・奥井純子・加古美由紀・山田洋平・片岡紀子・川田初美
小田キミエ・小田賢一・片桐初男・加藤民江・加藤公彦・河合京子・河田啓子・川端文江・河野サトコ
菊池恵美子・菊池隆子・木下ゆり・木村満・帰来堂・熊谷里枝・グラクソ スミスクライン（株）・栗村道夫
国際ソロプチミスト名古屋一中・小谷明・児山俊浩・酒井由美子・佐野春臺・佐野朝江・佐野考宏・杉富枝
坂光信夫・椎野誠一・塩井健介・柴田弥生・柴田益江・渋谷伸子・島谷倫次・新穂高温泉ひがくの湯
鈴木泉・杉本みな子・杉江修二・杉崎卓也・鈴木千雄・鈴木文代・住友正武・住友光子・高山睦枝・森岡悠
高階康子・立花玲子・田中由紀子・高林好子・玉木奈美枝・土屋二郎・土屋久仁子・手塚和子・出村初枝
ドリンクス倶楽部ジェムソン・トゥルムホッホメデティック（株）・戸谷良造・中野朋義・中林俊壹
西いずみ・西山英子・野々山洋子・野村浩子・長山毅・那須浩正・滑川正雄・成瀬孔基・西尾彰泰・菱田純代
清水清美・服部敬司・服部将也・濱田玉枝・樋口慶子・花木達美・平野雪夫・深川善治・深川浩子
日比野公治・日比野丈夫・日比野福代・日比野祐士・丸山由生・三島当美子・水谷裕子・見田くるみ
光川千鶴子・美濃和茂・宮城島拓人・宮本信代・宗吉美由紀・森下理香・山内礼子・山田君枝・山本由紀
藪下彩子・ユニバーサル基金・脇田かおり・榊原純夫・百合草宮子・岩崎奈美

編集後記

今年も皆様のご理解とご支援により、無料医療キャンプを開催、無事終了できました。ありがとうございました。現地 NGO ルーネルド、村人との交流やコミュニティセンター建設が着々と進む様子は日々、我々の励みとなりました。皆様のご支援は医療キャンプを実施可能にするばかりでなく、現地での我々の背中を後押ししてくださっています。この場をお借りして、心よりお礼申し上げます。

現地ではコミュニティセンターの建設が進み、次は設備を整えることが必要です。そのひとつとして、井戸掘削の実現を今年度の目標としております。我々と現地の NGO も実現のため様々な努力を進めていく所存ですが、是非皆様の周りの方にも当会をご紹介いただければと思います。どうかよろしく願いいたします。

今後とも活動へのご理解とご支援の継続をお願い申し上げます。

岩崎

事務局：名古屋市東区葵 1-25-1 ニッシンビル 906 TEL/FAX：052-933-1588

ホームページアドレス：<http://asante-nagoya.com>

フェイスブックアドレス：<https://www.facebook.com/asante.nagoya>